

学長時代の国際交流

～ サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学創立 30 周年記念式典 ～

武 田 建

★学長の仕事は骨が折れる

1985年9月12日、城崎進学長が突然辞任された。そのため、次期学長が選出されるまでの間、学長に代わって最低限の仕事をする「学長事務取扱」を置く必要が生じた。

当時、社会学部長を務めていた私は、集まった学部長の顔ぶれを見まわして、私が一番年下のくせに最古参であることに気が付いた。これはいけない、なんとかしよう。「一番年長の方が、学長事務取扱になればいいのではないですか?」と、もっともらしく申し上げた。それに賛同する声もあったが、すぐ八重津洋平法学部長が「学長選考規程を見ましょう」とおっしゃる。それを読むと、一番古手、つまり先任学部長だと書いてある。そんな規程は駄目だとは言えない。結局、私に学長事務取扱というお役目が回ってきた。そして、11月26日に行われた選挙で学長に選出されてしまった。



こうして、私は1985年11月から89年3月まで学長を務めた。学長と聞くと「格好いい」とか「大学のシンボル」とか言われることがある。しかし、実情はそんな結構なものだとは言い難い。少なくともその昔、私が学長だった頃はひどいものだった。学長に大きな予算が付くわけではない。大きな権限もない。大学の中の重要な決定というのは、全て大学評議会とか学部教授会の意思に基づいて行われる。学長は、大学評議会の司会者に過ぎない。また、当時は、予算とその執行、ならびに職員の人事は、全て理事長・院長の権限のもとに置かれていた。学長はその巨大な権限を持つ理事長・院長と大学の間で立たされ、右往左往するのが現実の姿であった。

大学評議会で叱られて頭を下げ、各学部教授会と大学の要求をもって理事長と渡り合い、もう一方で、ひたすら頭を下げ、理事長に大学の無理なお願いをするのが役目であった。

学長や理事長になると、当然授業は持てない。持ってもせいぜいゼミナールぐらいである。大学教員にとっては、授業が生き甲斐である。しかし、学長には、そんな贅沢は許されない。

私は旅行が嫌いだ。ところが、私立大学連盟、大学基準協会、そして文部科学省と、そんな頻りに集まらなくてもいいと思うのに、重要会議だといって、次から次に「東京に来て」と学長にはお呼びが

かかる。その外に、たまにはあるが、キリスト教系の大学の学長会議まである。

その会議に出席した時のことだ。初めて行った明治学院大学のキャンパスで、迷子になってしまった。ゆくべき建物は教えて貰ったが、その入り口にあるエレベーターは点検中だ。代わりに階段が分からない。2階の行くべき部屋を見ながらうろろうろした私が悪かった。ほんの小さな段差に足を取られて、足首を捻ってしまった。学長秘書にお願いして、足首を冷やすシップを買ってきて戴く。ひんやりする肌触りは気持ちがいいが、それだけのことのような。痛みはどんどんひどくなる。午後にかかれる私大連盟の会議は欠席させてもらい、飛行機で伊丹に帰ることにした。空港からタクシーを飛ばして、甲東園の織部接骨院に駆け込んだ。

「捻挫ではなく、立派な骨折です」。全治4週間という診断である。足の甲を包帯でギリギリ巻きにされ、松葉杖をつきながら我が家に帰った。その頃、女王様はテニスの後、近所の焼き鳥屋で打ち上げパーティーだったとか。骨折してうんうん唸っている夫をひとり置いて、何たることぞ!

翌日から松葉杖出勤である。多少不自由ではあるが、足を骨折した選手はチームの中に常時何人かはいる。不自由さを少し体験出来るとか言って自らを慰めながら出勤し、夕方仕事が終わったら、いつものように高等部のグラウンドへ。その頃には、慣れぬ松葉杖のために脇の下が痛くなっていた。顧問の崎弘明先生にお

願いで保健室で車椅子を借り、元選手の東元春夫先生に押し掛けて載ってグラウンドに下りる。

高等部の練習が終わると、翌々日の京大戦を前にした大学チームを覗いてみた。いつもならばすぐにやって来る芝川龍平も堀古英司も、一瞬ぎよっとしたのか寄って来ない。「オーイ」と手を振ったら、やっと来てくれた。

土曜日の対京大戦、関学は無残にも大差で敗れてしまった。しょんぼり試合場から出ようとする、藤田のダンちゃんこと、藤田允国際センター室長に捕まって、来週（1986年12月2日）インドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学の創立30周年記念の式典があるから、出席しろという命令である。「僕は一昨日、東京で足を骨折してこの通り松葉杖ですよ」と言うと、「試合を見に来られるではないか」と言われてしまった。

翌日曜日は高等部の関西大会準決勝である。神戸市のサッカー場で試合だった。松葉杖姿の私を見ると、新聞記者たちが、「どうした」と質問をする。何でも記事にするのが彼らの仕事だ。冗談のつもりで、「関学の守備チームに対し、相手の関大一高のクォーターバックになってトリプル・オプションをやっている、骨折してしまった」と言ったら、そのままデカデカとスポーツ新聞の記事にされてしまった。

★インドネシア出張

私は、学長をしながら高等部のアメリカンフットボール部監督を続けていた。シーズン途中、いかに公務とは言え、数日間であっても監督がチームを離れるということはもっての外である。そこで、インドネシア行きに当たっては、最短のスケジュールを立てて貰った。だから、ジャカルタ到着は夜9時半、ホテルに着いたのは午前1時を回っていた。寝ようすると電話がかかってくる。明朝一番の飛行機で飛んで来いと言う。スマランまではシャトル便だから予約切符はない。当日買えと言う。ウトウトすると、大きな声で目が覚める。後でわかったのだが、この国の圧倒的多数はイスラム教徒で、朝早くというか、真夜中に大きな声でお祈りをしていたのである。モーニングコールが鳴った時、我われ夫婦はとっくの昔に目が覚めていた。とにかく、タクシーを飛ばして、空港に一目散。おかげで出発30分前には到着できた。切符も買った。女王様はコーヒーが飲みたいとおっしゃる。注文すると、液体の上にコーヒーらしき粉が浮いている飲み物を持ってきた。出発前、そんな時には「テー」と言ってお茶を貰えと、ある同窓生が教えてくださったことを思い出したが、後の祭りである。

スマランの飛行場に着くと、学長夫人が迎えに来て下さった。学長はインドネシアの方が、奥様はオーストラリアの方だ。学長が若い頃、留学中に結婚なさったと後でうかがう。オーストラリアの英語は苦手などと言ってはられない。今、我々は母校を代表して、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学創立30周年のお祝いに来ているのである！

インドネシアは昔、オランダの植民地であった。飛行機が着いたスマランは元軍港で、今でも会社や工場が沢山あるらしい。かつて、そこで働いていたオランダ人は暑い海辺を避けて、山の方にあるサラティガという避暑地に住んでいたようだ。そのあたりに、我が協定校は30年前に創立されたのである。

大学差し回しの車に乗って、ものすごいスピードでサラティガまで走る。先発の藤田国際センター室長が迎えてくださる。大きなゲストハウスに通されると、幾つものシャツとドレスが置いてある。これを着て祝賀パーティーに出るよという命令だ。

直ぐに大学の行事が始まるから車に乗れという。トイスタ学長の車に乗って会場にゆく。この日の最大の行事は、日本万国博覧会記念基金から贈られた800万円の寄付金をもとに設置された視聴覚施設のテープカットであった。この寄付を貰うのに、我が関西学院の国際センター室長、と言うことは藤田さんが大きな役割を演じて下さったことを、現地に行って初めて知った。聖書の「右手のすることを左手に知らせはならない」（マタイ伝6章3節）という教え通り、藤田さんはこれについて何もお話しになることはなかった。私は、その藤田さんの大学を代表してきているのだ！ 「一言スピーチを」と突然言われて驚いた。右手で父の形見のステッキをつきながら、壇上にあがるまでに考えた。「私の足の骨が折れたからと言って、両校の関



G号館（西宮上ヶ原キャンパス）の「**フジタ・グローバルラウンジ**」は、藤田允氏の国際交流における貢献と学院への遺贈を顕彰して命名されました。同氏が室長を務める国際センターが1991年3月に閉鎖された時、同氏はこう書いています。「12年の歴史を誇り、学内外にあって実にユニークなしかも輝かしい活躍と貢献をして来た国際センターにとっては、屈辱の年であった。当センターが開拓し築いてきた大部分の業務が当事者と相談することなしに大学の方に移管され、また当センターの閉鎖に関しても公式には一言の協議もなく行われた様である…」。



Willi Toisuta

インドネシアの人達は儀式やスピーチが好きようだ。学長のスピーチは、なんと1時間10分以上も続いた。さらに、理事長、市長、キリスト教の教会関係と続き、いよいよ外国からの来賓のスピーチである。まず、創立当時の姉妹校であるフリー・オランダ大学の学長からである。背がものすごく高い学長さんが、背の低いトイスタ学長と握手すると、少々滑稽な姿だ。笑いが漏れる。さらに、壇の上にあがると、ご自分の声がちゃんと入るようマイクをほぼ垂直に立て、「ごめんなさい。私はこんな身長に生まれてしまいました」が第一声であった。会場からは、やんや喝采だ。次は、日本の学長さんの出番である。小さな男が、しかも杖をつきながら危ない足取りで壇に上がる。垂直に立ったままのマイクに手を当て、それを直角に戻しながら、「すみません。私はこんな身長に生まれてしまいました」と、オランダの学長さんの言葉を繰り返した。これにも、やんや拍手喝采だった。

こうして、この日は夜まで祝賀ムードの式とパーティーの連続で時が過ぎた。今から30数年前の思い出である。申し訳ないが、記憶に残っているよりも、忘れてしまったことの方がはるかに多い。あのトイスタ学長ご夫妻はどうしておられるだろうか？ やがて、天国で再会出来る日も近いと思う。

【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】

係が壊れることはない。それどころか、医師に言わせると、折れたところがつながったら、その部分はこれまで以上に強くなるそうです。それと同じように、皆様と私たちとの結びつきが今まで以上に強くなることのシンボルが私の骨折です」といった意味もない話をした。ご出席の皆さんは、遠い日本の国から来たゲストには寛大である。大きな拍手が起こった。やれやれ。

翌日は朝の9時から30周年記念式典である。これからが本番だ。後生大事に持参した紺のスーツを着て、式で話す祝辞の原稿を左手に持ち、右手に例の杖をつけて、最前列の席に座らして戴く。とにかく、骨折を押して、はるばる日本から杖をつけてやってきたというので大評判である。

1987. 1. 31

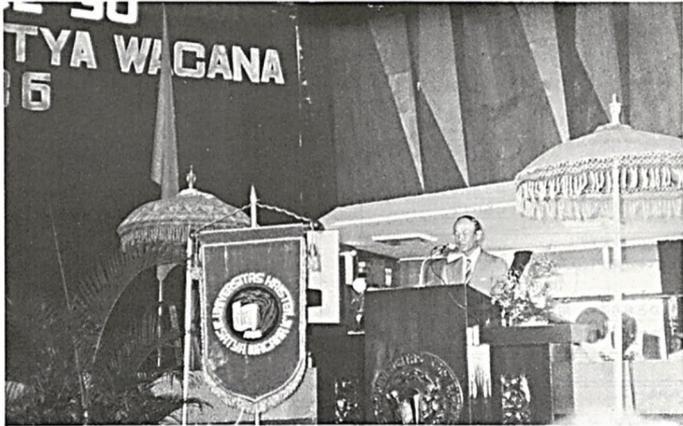
第106号
編集室
広報室

関西学院広報

サ大創立30周年式典に学長出席

さる12月2日、姉妹校サテイヤ・ワチャナ大学の創立30周年式典が行われ、本学を代表して武田建学長並びに藤田允国際センター室長が出席した。武田学長は式典で祝辞を述べるとともに、本学からの表敬のための記念盾を贈呈した。また、この機会に日本万国博覧会記念基金より、本学を通じて贈られた800万円の寄付金を基に設置されたサ人の視聴覚施設と語学センターの開所式で武田学長夫妻がテープカットを行った。トイスタ・サ大学長はその式辞の中で繰り返し本学の協力と支援に対し、感謝の意を表した。

サテイヤ・ワチャナ大学講堂で祝辞を述べる武田建学長。写真下
日本万国博覧会記念基金からの寄付で設けられた視聴覚機器の一部。写真右

もくじ

規程	2	人事	7
報告	6	各部局の動き	7

- 1 -

「広報誌」として親しまれた『KG TODAY』の紙媒体としての発行が310号(2021年3月)をもって休刊となりました。広報室が発行する『学院広報』の始まりは、1970年2月2日でした。7号(71年5月6日)で一旦途切れましたが、3年後に『関西学院広報』として再刊されました(1号:74年6月25日)。誌名は、190号(96年6月1日)より『K. G. TODAY 関西学院広報』、287号(2015年4月)より『KG TODAY 関西学院広報』と表記されています。フルカラーになったのは、251号(2009年4月)からです。

『学院史編纂室便り』第53号(2021年4月20日)
 関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ヶ原1-1-155
 TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462
<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>